

Kappa Novels



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。また、今後、どんな本をお読みになりたいでしょうか。どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
(郵便番号112)

光文社 出版局

長編推理小説 悪魔の関係

昭和57年 7月10日 初版1刷発行
昭和57年 8月5日 3刷発行

定価 680 円

著 者 ささ ざわ き ほ
菅 沢 左 保
東京都小平市小川東町2028

発 行 者 大 坪 昌 夫

印 刷 者 萩 原 崇 男
東京都文京区後楽2-21-12
萩 原 印 刷

発 行 所 東京都文京区音羽2 株式会社 光 文 社
振替 東京6-115347 電話 東京 (942) 2241 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 (複本製本)
表紙の模様・意匠登録 116613 © Saho Sasazawa 1982

ISBN 4-334-02474-2

Printed in Japan

長編推理小説

あく ま かん けい
悪魔の関係

ささざわ さ ほ
笹沢左保



カッパ・ノベルス

悪魔の關係 目次

心中死体	5	到達	128
魔性の夜	20	朝の告白	157
笑う刑事	42	頂上への道	179
寢室	59	歡喜のあと	201
愛と疑惑	80	悪魔の正体	222
白昼の陶酔	102	敗北	243

イラストレーション

中^{なか}原^{はら}
脩^{おさむ}

心中死体

真っ暗なので、相手の顔を確認することはできなかった。

香代は初め、夫だと思っていた。夫以外に、香代のベッドの中へはいつてくる人間など、いるはずがないからであった。

だが、そのうちにたとえ夫であっても、ずいぶん妙なことをするものだと、香代は気がついたのである。

夫の五十嵐貞夫は、まだ三十五歳だった。夫婦の夜の関係に、照れ臭さを覚えるような年齢ではない。

また、夫には妻を犯して楽しむといった趣味はなく、むしろ威張って正常な行為を求めるほうであった。

よくいえば健康的なのだが、悪くいえばセックスに工夫がないのだ。夫の五十嵐にいわせると、刺激が欲しけ

れば愛人を相手にするということである。

香代を抱くのはあくまで習慣であり、義務的な行為だという。そうした夫婦関係に、楽しむためのテクニクなど必要ではないと、五十嵐は何度も香代の前で言いきっているのだ。

その夫がベッドの中に忍び込んで来て、いきなり香代のうえにのしかかったりするはずはない。

夫であればまず寝室の電気をつけて、香代を叩き起こしたうえで裸になるのを手伝わせ、それからベッドにはいつてくるだろう。

夫ではないのかもしれない。

それに、眠っている香代を、夫が求めてくることなど、あり得ないのではないか。この二年間、香代のほうが催促することで、ようやくそれに応ずるという五十嵐だったのである。

四カ月前から、夫婦間のセックスは、完全に途絶えてしまっている。

やはり、夫ではない。

夫でないとするれば、この男はいったい誰なのか——。愕然となつて香代は、身体からだのうえの男を押しのけようとした。だが、思うように腕が動かないし、男の重みは

ビクともしなかった。

逆に男の膝が、香代の太腿を開きにかかっている。

恐怖感に、香代の全身がすくんでしまっていた。叫んだり、悲鳴を上げたりしようとしたが、声も出なかった。

香代は抵抗したが、ただ身を揉むようにするだけで、精いっぱいであった。香代は、泣き出していた。

男は容赦なく、香代に触れてくる。香代の一方の足は、男の肩のうえにあった。すでに香代の下半身は、無防備状態だということが、はっきりわかっていた。

絶望的な気持ちになった。最後の抵抗を試みたが、やはり身体の位置を変えることすらできなかった。

明らかに男のものと思われる異物感が、香代の女の部分にあてがわれた。香代は、殺されそうな声を出していた。

「やめて、やめて、やめてえ！」

その自分の叫び声で目を覚まし、香代はとび起きていた。

静まり返った家の中であり、寝室のベッドには香代しかいなかった。夢だったのだとホッとすると同時に、香代はひどく寝汗をかいていることに気がついた。

チャイムが鳴った。さっきから何度も、チャイムが鳴

っていたのかもしれない。

手早くネグリジェのうえにガウンをまとい、香代は寝室を飛び出した。チャイムの音が、急に大きくなった。

リビングを横切りながら、壁の時計に目を走らせた。十一時を、回っていた。ベッドにはいったのが十時すぎだったから、まだ一時間と眠ってはいないのだ。

3LDKのマンションだが、家庭らしい温かみはなかった。長いあいだ住む人間がいない家みたいに、ひんやりと冷たい空気が、玄関まで続いていた。

チェーンだけは掛けたまま、香代は玄関のドアをあけた。思わぬ訪問者の姿が、チラッと目に触れた。

制服警官であった。

香代はあわてて、チェーンをはずした。

「夜遅く恐縮ですが、五十嵐香代さんですね」

体格のいい若い警官が、笑いのない顔で言った。

「はい」

香代は首のところで、ガウンの衿を合わせた。

「ご主人は、五十嵐貞夫さん……」

奥のリビングのほうへ、若い警官は目をやった。

「そうです」

香代は、アルコールの匂い^{にお}がしないだろうかと、気に

かけていた。

このところ洋酒の二、三杯も引っかけないと、眠れない習慣がついてしまっているのだ。一時間前に飲んだ寢酒では、まだ匂いぐらいは残っているかもしれない。

「ご主人は、お留守ですか」

「はい」

「勤め先から、戻られないってことなんですか」

「いいえ、東京にはいないはずですよ」

「いないはずって、奥さんにもはっきりわからないんですか」

「たまにしか、ここへは帰りませんし……。主人の行動については、確信を持って申し上げられないんです。ただ、三日前に帰って来たとき、主人は、旅行に出るって言ってましたから……」

「旅行にね」

「当然、わたしには主人がいつ帰るのか、見当もつきません」

「このマンションに住んでいる人の専用駐車場は、確かに地下にありましたね」

「はい」

「ご主人の車は、紺色の……」

「ポルシェです」

「その車は現在、地下の駐車場にありますか」

「いいえ、旅行に出かけるのに主人はもちろん、自分の車を運転して行きましたから、いまはございません」

「そうですか。どうやら、間違いないみたいですね」

若い警官は、手帳を取り出した。

「何が、間違いないんでしょうか」

香代は、警官の顔を見守った。

「お気の毒ですが、どうも悪い知らせになるようです。自分は確認をとるようという連絡を受けて、すぐその交差点にある派出所から来たんですが、長野県の諏訪湖で今日の夕方に見つかった心中死体の男のほうが、お宅のご主人らしいってことで……」

表情を動かさずに、若い警官は言った。

2

翌朝、五十嵐香代は、長野県の諏訪湖へ向かった。

すでに、死体となって見つかったのである。病院へ駆けつけるのと違って、寸時を争うということにはならなかった。

それで、昨夜のうちに車を飛ばしたり、今朝の始発列車に乗りたりするほど、香代は急がなかったのだ。

そうかといって、のんびり構えていられることでもない。香代は朝の七時に、南青山のマンションを出た。

新宿駅へ直行して、特急あずさ3号の切符を買った。

八時に新宿を発車して、十時四十六分に上諏訪につく。

もう、夏の行楽シーズンは去った。それでもまだ未練げに、遊びに出かけたがる人がいる九月の第三日曜日であった。

グリーン車も、決してすいてはいなかった。三分の二の席が、埋まっている。三日後が秋分の日だから、東京を離れる人が少なくないのかもしれない。

どこへ何をしに行くのか知らないが、まったく閑人が多いのだと、香代の気持ちは冷えきっていた。

この列車に、ほかの女と心中した夫の遺体確認のために出かけていく人妻が、ひとりでも乗ってるだろうか。そう思うと、香代は何となく馬鹿らしくなる。

夫の五十嵐貞夫は、間違いなく死んでいる。年齢、身長、顔の特徴、衣服などすべてが一致していた。

身分証明書、運転免許証も五十嵐のものだった。諏訪湖畔の旅館の駐車場に残されていた紺色のボルシェも、

ナンバーから五十嵐所有のものとはっきりした。夫が死んだ――。

だが、香代には悲しみはない。

実感が湧かないからというのではなく、夫への執着心がとつくなっているためであった。

ほかの女と心中したことなど、問題ではなかった。嫉妬することもないし、口惜しいとも思わなかった。

心中した相手の女には、お気の毒さまとむしろ同情したいくらいだった。

そもそも、五十嵐との結婚が、間違っていたのである。結婚してまる四年になるが、夫婦らしい生活ができたのは、新婚時代の一年間だけであった。

一年をすぎたころから、五十嵐の浮気が始まった。それでも、その後の一年ぐらいいは、どうにか家に帰って来ていた。

五十嵐の帰宅が週に一度になったのは、二年前からのことであった。そして、この四カ月は一度として、セックスのない夫婦になっていたのである。

二年前から、別居していたのと変わらないのだ。

愛もなければ、情もない。五十嵐に対しては、香代の女としての心が死んでしまっていたのだった。

列車は、八王子に停車した。また何人かの客が、グリーン車にも乗り込んで来た。香代の隣りには、誰もすわらなかつた。

しかし、通路をはさんだ並びの席には、男がひとり腰をおろしたようである。香代は関心もなく、その男のほうへ目をやらなかつた。

ところが間もなく、香代は横顔に男の視線を感じるようになったのであつた。

もちろん、香代は知らん顔でいた。並びの席にすわつた男は、かなり無遠慮に香代の横顔を見つめている。

なぜ、それほど香代に興味があるのか、わかるはずもない。あるいは、通路を隔ててという距離が、女を観察するのに、ちょうどいいのかもしれない。

見覚えがあるというなら、声をかけてくるだろう。もし列車の中で女を引っかけるという魂胆ならば、わたしはこれから主人の遺体を確認しに行くのです、と言ってやればいい。

おそらく男は、恐縮したり困惑したりするに違いない。香代は窓外へ、視線を投げかけた。山が多い視界になつていて、緑一色に彩られた地上には、まだ秋の訪れが感じられなかつた。

夫と女は、諏訪湖に浮かんだボートの中で、死んでたという。服毒心中ということになる。

夫と一緒に死んだ女は、北田マチ子という名前だそうである。

香代には、心当たりもない名前だった。もっとも、夫の愛人や彼女の名前を、香代が知るはずはないのであつた。

年は、十九だという。

三十五歳の夫が、十九歳の女と心中した。ずいぶん若い女と死んだものだ、と、香代はそんな感想しかなかった。香代は二十四で五十嵐と結婚し、いまはもう二十八歳になっている。五十嵐は妻より九つ若い女と、心中したということになる。彼自身も北田マチ子とは、十六という年の差がある。

心中する男女には、年齢的に釣り合いがとれていないというのが多いらしい。そういつたところにも、死なずにはいられない変則的な男女関係の悲劇性が、秘められているのかもしれない。

並びの席の男が立ち上がった。

通路を、歩いていく。トイレに、立ったのだろう。

香代は、男の後ろ姿を見送つた。

背が高く、瘦せている。ひょろっとした感じだった。黒いスーツを着ているのが、香代には気に入らなかった。香代も、黒いスーツという服装だったからである。遺体に接するという事で、いちおう喪服のつもりだったのだ。

香代は、サングラスをかけた。トイレから戻ってくる男を、正面から見てやろうと思ひ立ったのであった。

それには、こっちの目の位置を誤魔化すために、サングラスをかけたほうがよかった。

男が、姿を現わした。通路を大股に、歩いてくる。ネクタイも、黒だった。殺し屋スタイルを氣どっているのかと思つたが、それにしても凄みに不足していた。

意外に若い男で、香代よりも年下に見えた。二十五、六だろうか。

優男というか色男というか、女っぽい美男子なのだ。どことなく幼くて、頼りない青年というタイプだった。今日の可愛い男の子だと、香代は思つた。

髪だけは、短めであつた。

それと比較するように、香代はふと、自分のサーファ・カットの髪の毛に手をやつた。

男はもう、目の前にいた。男は立ちどまって、香代を

じつと見おろすようにしていた。

3

列車が上諏訪駅のホームへはいると同時に、香代はそそくさと席を立つた。荷物は隣りの空席に置いてあるバッグと、茶色で小型のスーツケースだけだった。

香代は真つ先に、列車の乗降口へ向かつた。例の男が何となく、薄気味悪くなつていたのである。

とにかく上諏訪で列車を降りてしまえば、例の若い男との縁は切れるのであつた。列車のドアが開くのを、香代は足踏みをしたような気持ちで待った。

ホームに降り立つた香代は、一種の解放感を味わつた。例の若い男には二時間以上も、見つめられればなしでいたのだ。どうにもできないことだけに、香代には精神的な苦痛にもなつていたのである。

駅前から、タクシーに乗った。

行く先は、市立病院であつた。心中した男女の遺体は、市立病院の霊安室に安置されているという。

七、八分で、市立病院についた。タクシーを降りて、香代はスーツケースを足もとに置いた。

五階建ての病院の建物を、香代は振り仰いだ。市立の総合病院はまだ新しいらしく、建物がまぶしくらいに真っ白だった。

その鮮やかさを強調しているのは、頭上の抜けるように青い初秋の空であった。久しぶりに本物の青空を見たような気がして、香代は旅先にいる自分を感じていた。

背後で、車のドアのしまる音が聞こえた。香代は、何気なく振り返った。

とたんに香代は、吸い込んだ息をとめていた。

香代の目の前に、タクシーを降りたあの若い男の姿があったのである。

アタッシュ・ケースを手にして、男はゆっくり近づいて来た。通りすぎることもなく、男は香代のすぐ前で足をとめた。

「やっばり、そうだったんですね」

女みたいに可憐で赤い唇を、男は動かした。

「はあ……？」

香代は乱暴に、サングラスをはずしていた。

「マチ子と心中した男の人の名前を聞かされていたんで、列車の中でお見かけしたときから、そうじゃないかなって思っていたんですよ。失礼ですけど、五十嵐貞夫さん

の奥さんですか」

女っぽい美青年の顔には、はにかむような笑いがあった。

その男の視線を追って、香代も茶色のスリッパに目をやった。五十嵐が特別注文で作らせた新品のスリッパで、左端にS・Iという黒文字のイニシャルがはいっていた。

「このイニシャルだけで、五十嵐貞夫だって見当がついたんですか」

長身の若い男を、香代は見上げた。

「五十嵐貞夫さんの名前がぼくの頭を占めていたんで、それに一致するイニシャルを見たときに、きつと間違いないって決め込んだんですよ。あとは、奥さんの雰囲気に対する直感です。申し遅れましたけど、ぼくは末吉乙也（すけよしおつ）です。北田マチ子は、ぼくの恋人でした」

そう言いながら美青年は、少しも悲しそうな顔をしないのであった。

遺体の確認者が到着したと、市立病院から諏訪警察署へ連絡がいったらしい。十五分ほど待たされて、私服の警官が二人、香代と末吉乙也の前に姿を現わした。

直ちに病院の霊安室で、遺体確認ということになる。心中した男女の遺体は、並べて安置されていなかった。祭壇の前にある二つの棺のあいだには、適当に距離が置かれていた。

既婚者である男が、若い女と心中した。その男の妻が、夫の遺体を確認にやってくる。そうした妻の気持ちを考えて、男女の遺体を並べては安置しなかったのだろう。香代は、夫の遺体だけを確認する。

末吉乙也は、北田マチ子という恋人の遺体だけを確認する。

互いに、心中した相手の遺体には、目もやらなかった。死んだ人間の顔や姿は、余分に見たくないという思いが、香代にも末吉乙也にもあったのだ。

香代は、納棺されている遺体の顔を直視した。

そこには、五十嵐貞夫の安らかな寝顔があった。苦悶した表情もなく、きれいな死に顔である。

「いかがですかね、奥さん」

五十年配の刑事が、香代の顔をのぞき込んだ。

「主人に、間違いありません」

香代は、うなずいた。

顔が冷たくなっているし、香代の声もかすれていた。

おそらく血の気が引いて、紙のような顔色になっているのに違いない。

香代は気分が悪くなり、貧血を起こしていた。足から地面に吸い込まれていきそうで、香代は五十年配の刑事の肩にすがるようにした。

「しっかりして……」

香代の上体を支えながら、五十年配の刑事が呻くような声を出した。

「北田マチ子です」

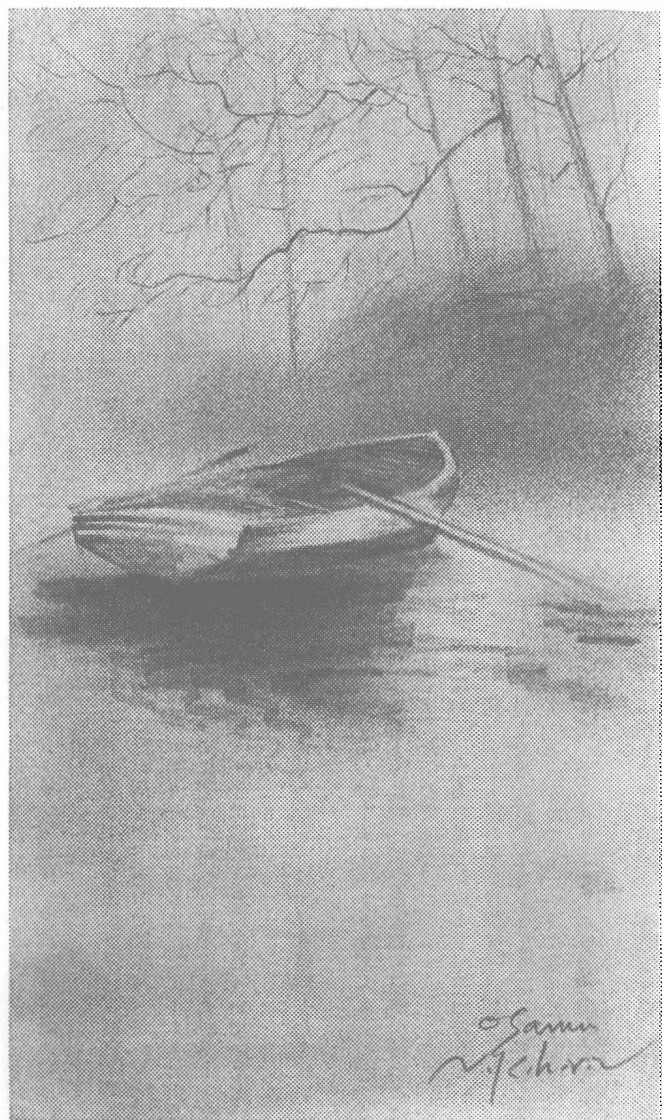
末吉乙也がそう言っているのを、香代はぼんやりと聞いていた。

霊安室を出た。

五分ほど休憩してから、警察の車で諏訪署へ向かった。警察では死亡状況を説明されたうえで、簡単な事情聴取に応ずることになっていた。

諏訪署についてからは、香代と末吉乙也は別行動ということになった。死亡状況の説明も事情聴取も、別個に受けるということなのである。

香代の相手をしたのは、例の五十年配の刑事であった。捜査係の大倉という警部補で、いつも細い目が笑っているような丸顔だった。



© Samu
V. J. Chirra

取調室のような個室ではないので、婦人警官が立ち会ふこともなく、気楽な話し合いという雰囲気になっていた。

「捜査係の者が、心中事件に首を突っ込むのかと、意外に思われるかもしれませんがね。まあ、九十九パーセントまで合意による情死、つまり単純な心中事件と断定されていますよ。ただ残り一パーセントの疑問に、捜査係が動員されたというわけです」

大倉という警部補は、笑っているように細い目で、香代をじっと見つめていた。

「疑問……」

香代は神秘的な眼差しを曇らせながら、花卉のような唇を小さく動かしていた。

大倉警部補の説明によると、五十嵐貞夫と北田マチ子は一昨日の午後、諏訪市のホテルに投宿したという。

上諏訪温泉の繁華街や諏訪湖畔の旅館ではなく、東寄りの山の中腹にあるホテルを予約しておいたらしい。

そのホテルの前を、霧ヶ峰へ抜ける道路が通っていた。予約は二泊ということで、明後日つまり今日には霧ヶ峰へ向かうと、北田マチ子がルーム係にそれとなく伝えている。

昨日の午前中に車を運転して出かけたとき、五十嵐貞夫は諏訪市内のガソリン・スタンドに寄り、満タンということで給油を頼んでいる。

午後になって五十嵐貞夫と北田マチ子は、紺色のボルシェをホテルに置いたまま、徒歩で諏訪湖へ向かった。二人は遊覧船に乗り湖を一周したあと、ボートを借り出している。湖岸に沿って南へ、五十嵐貞夫がボートを漕ぎ出し、北田マチ子は楽しそうにはしゃいでいたという。

以後、二人の姿や行動を、はっきり目撃した者はいない。

遊覧船、ヨット、モーターボートなどが水上にあっても、手漕ぎのボートに乗っている人間を眼前に眺めるほど、湖はせまくないのである。

夕方になって、二人の乗ったボートが戻って来ていることに、貸しボート屋の従業員が気づいた。

一時間の約束で借り出したボートなのに、すでに二時間が経過している。それでも、いまに帰ってくるだろうからと楽観して、貸しボート屋の従業員は騒ぎ立てなかった。

ところが、湖上に夕闇が迫るころになって、漁船が漕

ぎ手もなく漂流しているボートを発見した。

湖の西角の岸に、下水処理場がある。そこには人家もなく、芝生と樹木の緑が広がっている一帯で、無人の世界に等しい。岸辺に近づく船も、少なかった。

その岸寄りの湖上を、人影のないボートが漂っていた。オールも左右に、投げ出されたままになっている。

不審に思った漁民は、船を近づけてボートの中をのぞいてみた。そこには、それぞれ頭を逆方向にして倒れている男女の姿があった。

「まあ、どう見ても心中ということになるし、それも同意のうえでの情死っていうところですよ」

大倉警部補は、いっそう目を細めていた。

「服毒でしょうか」

香代は、恐る恐る質問した。

「今日これからの解剖結果を待たなければ、断言はできませんがね。まず間違いなくシアン化ナトリウムでしような」

「シアン化ナトリウム……」

「俗にいう青酸ソーダですよ。シアン化カリウムが青酸カリでして、一般に青酸カリ自殺といわれるのも、実はシアン化ナトリウムつまり青酸ソーダのほうなんですが

ね。ボートの中には、罐ジュースの飲みかけが二つありました」

「じゃあ、そのジュースの中に、青酸ソーダを入れて……」

香代の表情は、固くなっていた。

「それが、罐ジュースの飲み残しからは、毒物がまったく検出されなかったんですよ」

大倉警部補は、ゆっくりと首を振った。

青酸ソーダを、ジュースに混入して飲んだわけではない。何らかのかたちで青酸ソーダを口の中に入れて、それをジュースによってのみ下したのである。

「無色立方体の結晶になっているシアン化ナトリウムを、カプセルに詰め込みましてね。それをジュースで胃の中に流し込んだというのが、まあ最も一般的なやり方なんでしょうがね」

大倉警部補はタバコに火をつけて、ゆっくりと煙を吐き出した。

「青酸ソーダはそんなに少量でも、人間を死に追いやるんでしょうか」

香代は、まだ青白い顔に手をやった。

「青酸ソーダは、猛毒ですからな。ほんの微量でも、致